

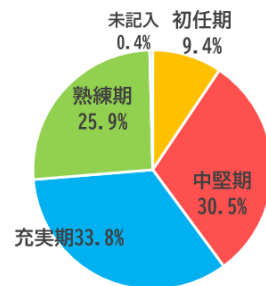
# 今、あらためて「不登校」を考える

## 「わからない」からはじめる子どもの理解



### ～「不登校に関する教職員の意識調査」の結果より～

「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）では、不登校児童生徒数は299,048人で、過去最多となりました。そのような状況の中、京都府総合教育センターでは「今、あらためて『不登校』を考える」というテーマで研究を進めています。令和4・5年度は「不登校」への理解や対応、また、現状やニーズを捉えるために、研修講座受講の方々に「不登校に関する教職員の意識調査」へのご協力をお願いしました。今回はその結果と、結果から得られたことをご知らせします。なお、「不登校に関する教職員の意識調査」は「不登校児童生徒の実態把握に関する調査」（不登校児童生徒の実態把握に関する調査企画分析会議、2021）に準じて作成しました。そこで、いただいた回答は、「不登校児童生徒の実態把握に関する調査」の子どもたちの回答と比較して、分析・考察を行っています。



「不登校に関する教職員の意識調査」協力者の内訳

それでは、教職員の意識調査の回答と、子どもたちの回答の、比較の結果からご覧ください。

## ■ 学校に行きづらい・休みたいと感じ始めたきっかけ

【不登校に関する教職員の意識調査】

生活リズムの乱れ      身体の不調 勉強が分からない      友達（いじめ・いやがらせ）      本人でもわからない      ネット、SNS等の影響

（多いものから5つを表示、同割合のものは並列表記）

### いじめやいやがらせ以外の「友達のこと」って何？

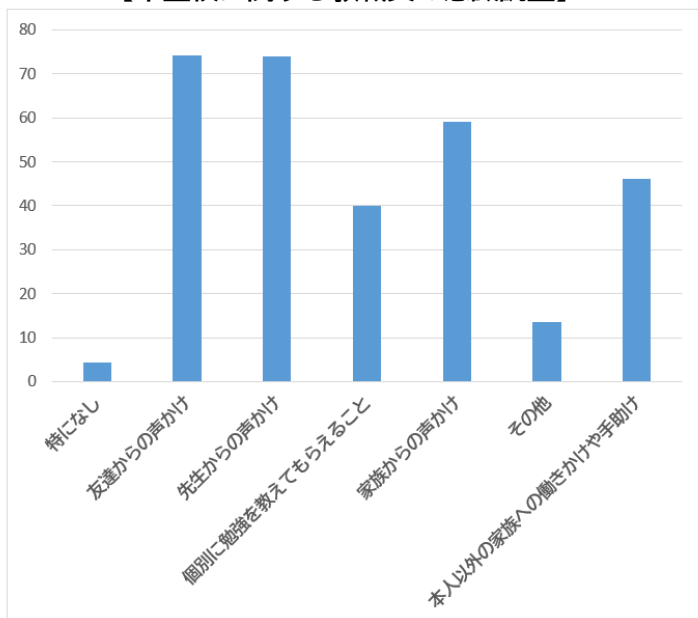
⇒裏面☺へ

【不登校児童生徒の実態把握に関する調査】

学年	性別	原因	原因	原因	原因	原因
小学6年	先生	身体の不調	生活リズムの乱れ	自分でもよくわからない	友達（いじめ・いやがらせ）	
中学2年	身体の不調	勉強が分からない	先生	友達	生活リズムの乱れ 友達（いじめ・いやがらせ）	

## ■ 休まなかったと思う 関わり

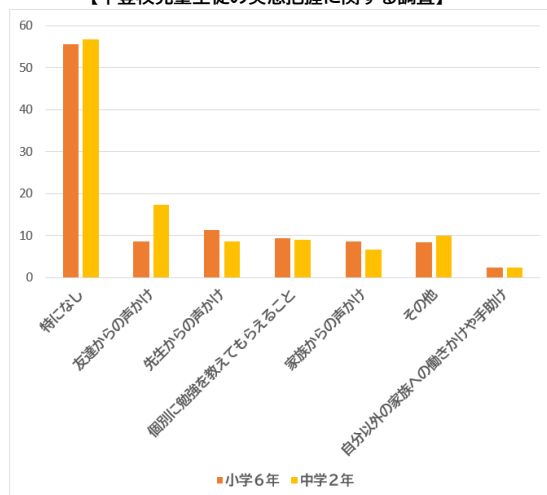
【不登校に関する教職員の意識調査】



## 2つのグラフから どんなことが考えられるでしょう？

⇒裏面☺へ

【不登校児童生徒の実態把握に関する調査】



1

# 学

校に行きづらい・休みたいと感じ始めた時の友達について、「仲のよい友達が1人いた」とか「2人以上いた」と答えた児童生徒は約8割いたそうです。それなのに、いじめやいやがらせではない友達の悩みを抱えているとは、どういうことなのでしょう。

たとえば、友達との関係の中で生じる小さなダメージに耐えられない？ 傷つかないでいられるように気を遣っている？ 関係を保つことが大変？ 一緒にいることに疲れてしまう？ 友達との関係の中で、このような悩みを抱えている子どもは少なくないのかもしれない。

私たち教職員は、友達関係が子どものころを支える大切な要素かもしれないということを意識しながら、教室や学校にいる子どもたちの「友達のこと」を、様々な面からみることで新たな理解を得られるのではないのでしょうか。

2

# 子

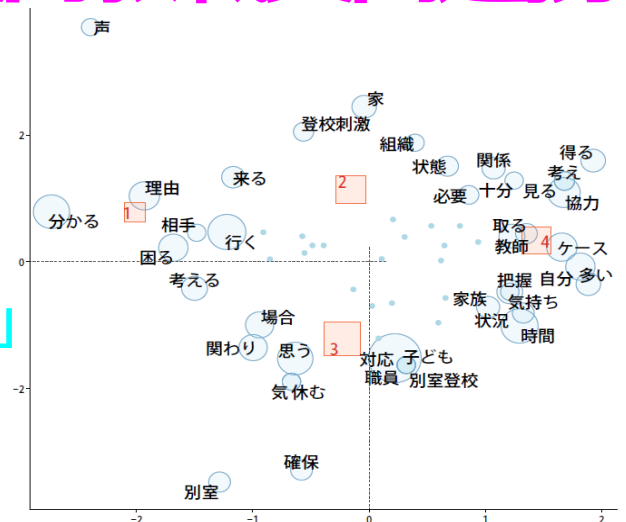
子どもたちの回答に、休まなかったと思う関わりは「特になし」がとても多いことに気づかれたでしょうか。「特になし」が伝えようとしていることはどういうことか。それを考えた上で、どう見守りどう関わるか、「関わり」を吟味したいものです。一方、子どもたちが、休まなかったかもしれないと思える対応への回答もありました。それをみると、友達や先生と関わることへの期待もあるのかもしれない。

「関わり」とも関連して、不登校や不登校傾向を示した子どもたちへの関わり方、つまりはどのような方法でアプローチしていくのかを考えることよりも、全ての児童生徒への普段の関わりを考えることを通して、個々の不登校児童生徒へのよりよい関わりがみえてくるかもしれません。

## 「関わり」をみいだす場 校内教職員間連携

不登校に関する教職員の意識調査では、教職員が不登校の児童生徒と関わる時に困ったこと・困っていることも尋ねています。その結果を、計量テキスト分析を用いて分析すると、キャリアステージごとに違いがあることがわかりました。

- ① 初任期 「なぜ不登校に？」
- ② 中堅期 「登校へのアプローチ？」
- ③ 充実期 「どうやって会う？」
- ④ 熟練期 「連携はどうする？」



ここで大切なのは、この違いを理解することが「チーム学校」として不登校児童生徒への理解と対応に、肯定的に働くと考えられることです。教職員間で困っていることを分かち合い、それを解消しようと考えた時、どのような資源がありどのような方策が考えられるかを検討すると思いますが、そこから新たな児童生徒理解の視点も生まれ、関わりの方角が見いだせる可能性が十分あります。

先生は、お近くにいる先生が今どのようなことに悩んでいらっしゃるか、ご存知でしょうか？  
先生は、ご自身の困りごとを、お近くの先生方と共有していらっしゃいますか？

学校外の機関との連携が必要な場合ももちろんありますが、まずは、周りの先生方と困っていることを交流・共有し、校内連携に厚みをもたせることも大切ではないでしょうか。

児童生徒を理解し、関わり続けるには、多くの時間を要するでしょう。考え続けるのは苦しい営みでもありますが、それくらい人のところは簡単に理解できないものです。不登校のきっかけについて、子どもたち自身が不明瞭なことを、教職員も「本人でもわからない」と考えることは、子どもたちを理解しようとしているからこそその結果ではないのでしょうか？ 繊細で、刻一刻と変化していく子どものところ、その時その時の一人一人のその状態に寄り添うには、

**「わからない」ところからスタートすること** です。わからないから、わかろうとするのです。

京都府総合教育センターとしても、不登校児童生徒の理解と関わりに資することができるよう、令和6年度も、「今、あらためて『不登校』を考える」というテーマで研究を行い、考え続けていきます。

